

# 高等教育における自然体験活動の 教育的意義と探究的学びへの可能性 —神奈川大学の実践を通して—

遠藤大哉・杉卓洋・青柳健隆・石井哲次

## 要旨：

本研究は、大学生の野外実習がライフスキルや非認知能力に与える影響を明らかにすることを目的とし、質問紙による量的調査と自由記述・参与観察による質的分析を行った。その結果、野外実習の前後で課題価値の4侧面と集中状態（DECS-E）がいずれも有意に向上し、自然環境での体験が主体性や将来意識を高めることが示唆された。質的データからは、豊かな自然の中での非日常的体験が、困難への挑戦や仲間との協働を通じて集中して楽しむ喜びや達成感をもたらし、成長の実感や将来への意欲に結びついていることが確認された。一方で、体験後の振り返りが浅く、深い学びへの導きが不十分であった点は教員側の課題である。今後は、探究的な学びの視点をプログラムに取り入れ、リフレクションの時間を確保し、適切なツールを用いて体験を確実に未来へつなげる教育的支援が求められる。

キーワード：探究学修、ミックスド・メソッド・アプローチ、野外教育、非認知能力、ライフスキル

## 1. 緒言

現代社会は、グローバル化の進展、急速な技術革新、そして価値観の多様化を背景に、将来の予測が困難な「VUCA（Volatility：変動性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性）」の時代に突入している。このような不確実性の高い社会においては、OECD（2015）やWorld Economic Forum（2022）が指摘するように、レジリエンス、協働性、主体的課題解決力などの「非認知能力（non-cognitive skills）」の育成が、持続可能なキャリア形成の鍵として、ますます重要性を増している。Heckman & Kautz（2012）の実証研究においても、これらの能力が学歴や所得以上に、人生の質や幸福感に長期的な影響を及ぼすことが示されている。

一方、日本では、内閣府（2023）の調査により、若年層の自己肯定感や自己効力感の低さが顕在化しており、深刻な社会課題として認識されている。こうした背景のもと、文部科学省（2020）は高等教育における体験的・探究的な学びの導入と推進を提唱しており、知識伝達型教育からの転換が求められている。すなわち、学生の主体性と深い学びを促進する教育環境の再構築が急務とされている。

神奈川大学では、このような社会的要請に応えるべく、「ゴルフ実習」「スノースポーツ実習」「マリントンスポーツ実習」「野外実習（キャンプ・スキー）」といった自然体験活動を体系的に展開している。これらの実習は、リーダーシップの涵養、自己理解の深化、自然との共生、挑戦への適応力の育成など、多様な教育的テーマを内包しており、Kolb（1984）の経験学習理論における「具体的経験→省察的観察→抽象的概念化→能動的実験」という学習サイクルを具現化する場として設計されている。

特に自然環境下での活動は、Hattieら（1997）のメタ分析により、自己概念やリーダーシップ、コミュニケーション能力といった非認知能力の向上に促進的な効果をもたらすことが示されており、学生の

内省的成長を促す教育的意義が高く評価されている。国内の先行研究においても、大学における野外実習は「社会人基礎力」の育成に有効であることが報告されており（井口他, 2020・徳田他, 2017・徳田他, 2024），量的研究による効果測定は一定の蓄積がある。一方で、質的研究アプローチの導入例は少なく、自然環境下での活動が非認知能力に与える影響についての量的・質的両面からの包括的な検証は依然として不足しているのが現状である。

本研究は、神奈川大学における複数種目の自然体験型実習プログラムに参加した学生を対象に、ミックスド・メソッド・アプローチ（量的調査+質的調査）を用いて、実習を通じて（1）学生がどのような変化を経験し、どのような意味づけを行ったのか、（2）ライフスキルおよび非認知能力がどの様に変化したのかを明らかにすることを目的とした。さらに、自然体験活動の教育的価値を再検証するとともに、体験に基づく探究的学びの可能性を拡張することで、高等教育における実践的カリキュラム設計や政策立案に資する知見の提供を目指す。

## 2. 方法

### （1）研究の方法

本研究は、2023年度に神奈川大学で実施された原則的に宿泊を伴う体験型研修（ゴルフ、スノースポーツ、マリンスポーツ）と野外実習（キャンプ・スキー）を対象に、大学生のライフスキルおよび非認知能力の変化を多面的に捉えることを目的としたミックスド・メソッド研究である（図1）。特に、以下の3手法を統合的に用いた。

- 量的調査：プログラム実施前後に質問紙調査を行い、ライフスキル、グリット（Grit）、課題価値、フロービークス（DECS）に関する変化を測定した。
- 質的調査A：宿泊実習終了後、参加学生による自由記述を収集し、KJ法を用いた分析により、体験を通じた内面的変容や学びの傾向を抽出した。
- 質的調査B（参与観察）：第一著者自身が全プログラムに参加し、現場での様子をフィールドノートに記録した。参加者の言動や行動に注目しながら、その体験を通じて見えてくる教育的な効果や、活動を進めるうえでの課題について検討した。

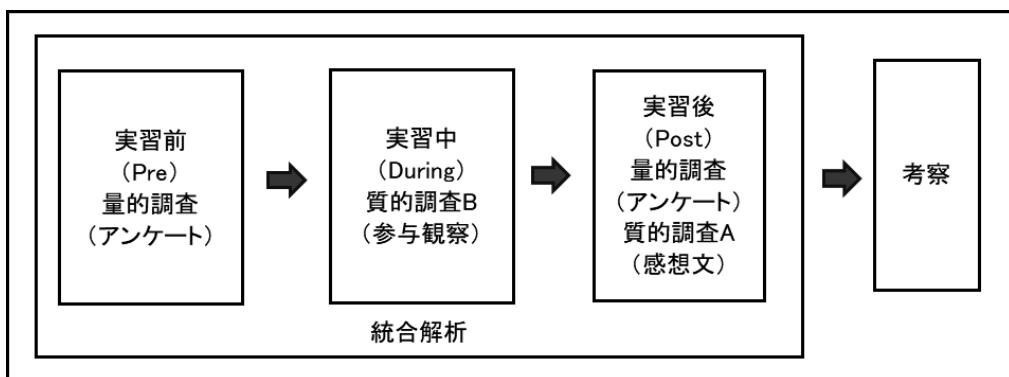


図1 ミックスド・メソッド・アプローチの構成と流れ

### （2）研究対象とプログラムの概要

本研究の対象は、ライフスキルおよび非認知能力の育成が期待される宿泊・体験型プログラムである。対象プログラムは、いずれも宿泊を伴う5日間にわたり実施され、体験型研修としてゴルフ、スノ

ースポーツ、マリンスポーツ（5日間日帰り形式）および野外実習（キャンプ・スキー）で構成されている。各プログラムは技術習得に加えて、以下のような非認知的スキルの獲得を目的としている。

- ・ コミュニケーション能力：共同生活を通じて多様な価値観と向き合い、協調性を育む
- ・ 問題解決能力：自然環境における課題対応を通じて、柔軟な適応力を培う
- ・ 自立心：日常生活の自己管理を通じて、自律性を促進する
- ・ リーダーシップ：グループ活動での統率力を育成する
- ・ ストレス耐性：自然環境下での活動を通じて心身のレジリエンスを向上させる
- ・ 自己肯定感：成功体験を通じて自己評価を高める

ライフスキルは、WHO（1997）によって「日常生活における問題や要求に建設的に対処するための心理社会的能力」と定義されており、以下の10項目を中心とされている：意思決定、問題解決、創造的思考、批判的思考、効果的コミュニケーション、対人関係、自己認識、共感性、感情調整、ストレス対処。

また、非認知能力とは、IQや学力テストなどでは測定が困難な個人の内面的特性を指し、OECD（2023）においては「社会情動的スキル（Social-Emotional Skills）」として分類されている。具体的には、自己制御、自己効力感、内発的動機づけ、対人関係能力、問題解決力などが含まれる。

### （3）量的調査と手続き

調査は、自然体験を含めた宿泊・体験型プログラムの実施前後において参加学生を対象に質問紙を配布し、心理的側面の変化を測定した。

量的調査に用いた心理尺度

① 課題価値測定尺度（伊田、2001）

学習内容に対する価値認識を測定するもので、興味価値、実践的利用価値、制度的利用価値、私的獲得価値、公的獲得価値の5つの下位尺度（各6項目、計30項目）から構成され、7件法で評価する。

② 大学生版ライフスキル尺度（島本、2006）

大学生のライフスキルを包括的に評価する尺度で、リーダーシップ、前向きな思考、対人マナーなど12下位尺度（各3項目、計36項目）を含む。4件法で回答される。

③ 日本語版 Grit 尺度（西川他、2015）

「根気（Perseverance）」と「一貫性（Consistency）」の2下位尺度（各4項目、計8項目）で構成される5件法の尺度。粘り強さと目標達成志向を評価する。

④ Deep Effortless Concentration Scale (DECS) (Marty-Dugas & Smilek, 2019)

フロー体験頻度を「内的集中」「外的集中」の2下位尺度（各8項目、計16項目）で測定し、7件法で回答される。

調査は、参加者が事前に半期授業を受講した後、実習の開始前（実習初日の朝）と最終日（実習終了後）の2時点で質問紙を配布・回収し、その場で記入・提出された。得られたデータはR（ver. 4.2.0）を用いて統計解析を行い、逆転項目の処理したうえで、各下位尺度の平均値（ライフスキル尺度は合計値）を算出し、実習前後の変化について各下位尺度について対応のあるt検定を行った。

### （4）質的調査 A の手続き

質的調査では、参加学生から自由記述によるテキストデータを収集した。設問は、履修動機、事前授業の印象、実習内容、全体を通じた感想などを含み、体験に基づく内面的な変化を記述させるものであった。収集データはKJ法に基づき分析し、語句や文脈から意味的まとまりを抽出・分類することで、

心理的・認知的変容の傾向を明らかにした。

#### (5) 質的調査 B（参与観察）の手続き

本研究において第一著者は、全プログラムに指導者として参加し、現場での観察をフィールドノートに記録した。参加者の言動、行動、グループダイナミクスなどを継続的に観察し、教育的な効果や課題、現場の特性を多角的に捉えた。参与観察の視点から得られた情報は、量的・質的データと統合して分析を行った。

### 3. 量的調査と質的調査の結果と考察

#### (1) 量的調査（質問紙尺度）の分析と考察

体験型研修（ゴルフ、マリンスポーツ、スノースポーツ）および野外実習（キャンプ・スキー）の各実習データを統合し、以下の4つの尺度について実習前後の比較を行った。

- 課題価値測定尺度
- 大学生版ライフスキル尺度
- 日本語版 Grit 尺度
- Deep Effortless Concentration Scale (DECS) External・Internal

対応のある  $t$  検定の結果、「課題価値測定尺度」の下位尺度である「公的獲得価値」「私的獲得価値」「興味価値」において、有意な差が認められた（表1）。また、「制度的利用価値」および DECS の下位尺度である DECS-E (External) で有意傾向が確認された。これにより、実習を通じて「課題価値測定尺度」（課題に対する価値認識）や DECS-E（外部刺激に対する集中状態）にポジティブな変化があったことが示唆された。

##### ① 課題価値測定尺度の変化について

###### 1) 公的獲得価値の変化について

公的獲得価値とは課題や実習が社会的に認められる価値や他者からの評価・承認に関連する価値認識である。今回、実習後に公的獲得価値の向上が見られたことは、学生が野外実習を通じてこの実習が「社会的に意義のある経験」と認識し、実習を体験することで、実習内容が社会的承認や評価に関連しているという認識が強まったと考えられる。このことは将来のキャリア形成や社会的役割への意識向上を示している。

###### 2) 私的獲得価値の変化について

私的獲得価値は、課題内容が望ましい自己成長や自己実現、自己肯定感につながるという価値認識である。今回、実習後に私的獲得価値の向上が見られたことは、実習が学生の自己効力感や自己成長を促進し、個人的な意味づけを強化したことを示唆している。このことは学習意欲や主体的な学びの促進につながることから、教育効果の重要な側面と言え、本実習において、実習生の学習意欲が高まったことが示唆される。

###### 3) 興味価値の変化について

興味価値は、課題自体の面白さや楽しさ、内発的動機づけに関わる価値観である。今回実習後に、興味価値の向上が見られたことは、実習内容が学生の好奇心や探究心を刺激し、積極的に取り組む動機づけを高めたことを示唆している。このことは学習活動の持続性や深い理解につながるため、教育効果の重要な側面と言え、本実習において、実習生の探究心が刺激され、学習の継続に繋がる可能性が示唆された。

表1 統合データによる質問紙尺度の時点間比較

尺度	下位尺度	before	afte
DECS	DECSE	† 4.71(1.19)	4.99(1.12)
	DECSI	4.72(1.16)	4.99(1.08)
Grit	一貫性尺度	2.62(0.81)	2.55(0.83)
	根気尺度	3.57(0.86)	3.68(0.71)
ライフスキル	コミュニケーション能力	9.60(2.03)	9.71(2.07)
	スケジュール能力	8.88(1.86)	9.39(1.99)
	リーダーシップ	7.96(2.12)	8.17(2.36)
	健康管理	9.37(1.91)	9.59(2.32)
	共感性	9.35(1.70)	9.59(1.87)
	前向きな思考	8.47(2.11)	9.02(2.33)
	対人マナー	10.16(1.66)	10.33(1.61)
	将未設計	9.31(1.96)	9.55(1.91)
	情報リテラシー	9.18(1.62)	9.44(1.67)
	社会規範	10.26(1.41)	10.12(1.69)
価値希求	自尊心	9.04(2.04)	9.33(2.04)
	自己学習	8.46(1.93)	8.83(2.09)
	公的寝得価値	* 5.23(1.17)	5.70(1.05)
	制度的利用価値	† 4.38(1.34)	4.79(1.53)
	実践的利用価値	4.83(1.09)	5.13(1.32)
	私的獲得価値	* 5.24(1.23)	5.87(1.04)
	興味価値	* 5.60(1.19)	6.10(0.83)

before : n = 68, after : n = 66

[† : p &lt; .10, \* : p &lt; .05]

実践的利用価値はマリンスポーツとスキーでのみ計測

#### 4) 制度的利用価値の変化について

制度的利用価値は、課題が大学や教育機関における制度的な成果にどのように役立つか、将来の制度的な利用可能性に対する価値認識である。今回実習後に、制度的利用価値の増大傾向が見られたことは、実習が学生にとって「大学の学び舎制度における位置づけ」や「将来の制度的な場面での活用可能性」への理解を深めたことを示唆している。つまり実習が単なる経験に留まらず、制度的なキャリア形成の一部として認識されたと考えられる。

課題価値測定尺度について総合的に考察すると、上記に示した課題価値測定尺度の下位尺度での有意な変化は、野外実習が学生の課題に対する価値認識を多面的に高めたことを示唆し、特に、社会的な望ましさの認識向上、個人的な成長や自己肯定感の強化、内発的な興味の増加が示されたと解釈できる。このことから、実習が個人的・社会的望ましさを増進し、価値ある経験として認識され、さらに学生の内面的な動機づけや自己効力感を高め、実習が楽しく魅力的な学びの場となっていることが考えられる。

#### ② Deep Effortless Concentration Scale-Internal (DECS-E) 尺度の変化について

本調査において、実習後の DECS-E 尺度に有意傾向の変化が認められた。これは、学生が自然や体験的な活動などの外部環境刺激に対して高い関心や集中を示していたことを示唆すると考えられる。このような外的集中の高まりは、チクセントミハイ (2016) が示すフロー理論においても重要な要素の一つである。フローフィードバックの初期段階では、自然環境や非日常的な体験が参加者の注意を現在の状況に強く引きつけ、活動への没入感や主体的な関与を促すとされている (チクセントミハイ, 2016)。したがつ

て、今回の実習では、こうした環境要因が学生の外的集中を高め、体験への積極的な関わりを後押しした可能性が考えられる。

一方で、DECS-Internal（内的集中）および「大学生版ライフスキル尺度」、「日本語版 Grit 尺度」については、実習前後で有意な変化は見られなかった。特に、DECS-Internal に変化がなかった点は、「大学生版ライフスキル尺度」に変化が見られなかった理由と共通していると考えられる。青柳（2024）は、スポーツの場面において「豊かな経験」を得るだけでは不十分であり、学生の成熟度によってはそこから深い学びを引き出すことが難しい場合があることを指摘している。さらに、こうした学びを引き出すためには、指導者やプログラムによる「働きかけ」が不可欠であり、「豊かな経験」と「学びを引き出す支援」は、スポーツ教育における車の両輪であると述べている。これらのことから、今回の実習においては、学生が経験した活動を内省し内発的動機づけにつなげるリフレクションや支援の仕掛けが十分でなかった可能性が高い。このことが内的集中およびライフスキルの向上が観察されなかった背景と考えられる。

また、「日本語版グリット Grit 尺度」に変化が見られなかった理由としては、実習期間が比較的短期間であったことが一因として考えられるものの、実際に短期間でも粘り強さの向上が確認された事例もある（Hiroya E., Yoji O., Kenryu A., Koichiro O., & Yoshinori S., 2015）ため、今回の実習内容自体が「粘り強さ」や「長期的な目標への努力継続」といった資質の育成に直接結びつきにくい性質であったことも影響していると推測される。

## （2）質的調査 A の分析（KJ 法）と考察

本調査では、履修動機・参加目的、前期授業・講義座学、実習の目標や場所、実習費用、改善点や問題点、実習の感想、各日の内容といった質問項目に対する学生の自由記述回答を対象に、KJ 法の手法（ラベル化、グループ化、図解化、叙述化）に基づく質的分析を行った。その結果、計 200 のラベルが抽出され、11 の小グループ（表 2）→4 の中グループ→1 の大グループ（表 3）に分類され、各グループ間の関係性を示す概念図（図 2）を作成した。

分析の結果、以下のような学生の学びや気づきが明らかとなった。参加者は「初めての非日常体験を通して、夢中になれる楽しさを味わい、自然との共鳴が生まれる。自然の試練に直面し、それを乗り越える中で、自己成長と未来への展望が得られる。体験を通じた学びが深まり、心の満足・達成・感謝が統合される。人との出会いと絆が深まり、こうした変容は動機づけ、専門的支援、プログラム設計によって支えられている。」

本実習においては、「初めての非日常体験」が学生に新鮮な刺激を与え、「夢中になれる楽しさ」や「自然との共鳴」を引き出すきっかけとなっていた。こうした体験は、日常とは異なる環境で自らの価値観や行動を見直す契機となり、学びへの関心や参加意欲といった内発的動機づけを高める要因となっていたと考えられる。

また、多くの学生が自然の中で「試練」や「困難」に直面し、それを乗り越えた経験を通して、「自己成長」や「未来への展望」を感じていた。このことから、適度な困難を含む体験は、達成感や自信を育む機会となり、心理的な回復力（レジリエンス）や自己効力感を高める可能性があることが示唆される。

さらに、「活動を十分に楽しんだこと」や「技術を高めたこと」からは、学生が集中して取り組む中で、没入感を伴う学習（いわゆるフロービング）に近い状態が生まれていたことがうかがえる。これにより、体験を通じた学びが深まり、「心の満足」「達成」「感謝」といった感情も統合され、学習の質が高められていた。

加えて、「人との出会いと深まる絆」が記述されている点からも、他者との関係性の中で信頼感や共

表2 小グループの作成

小グループ	カード一覧	表札
G1	新鮮, 貴重な経験, 初めて, 非日常	初めての非日常体験
G2	楽しさ以上の楽しさ, 没入感, 上達した喜び	夢中になれる楽しさ
G3	難しさ, 辛さ, 自然の厳しさ, 辛くても幸せ	自然の試練
G4	成長の実感, チャレンジ意欲, マスター, 将来に活かせる, 興味が深まった, またやりたい	自己成長と未来への展望
G5	仲間づくり, コミュニケーション, 仲間との絆, 出会い	人との出会いと深まる絆
G6	達成感, 充実感, 満足感, 感謝, 一生忘れない経験	心の満足と達成と感謝
G7	体験を通した知の広がり, ためになる学び, 新しい技術, 新しい発見, 体験による理解	体験を通じた学びの深化
G8	自然とのつながり, 自然の豊かさ, 自然への畏敬, 自然との触れ合い, 自然の中の心地よさ	自然との共鳴
G9	十分な動機づけ	行動を後押しする動機づけ
G10	プロの指導者の重要性	専門的支援の力
G11	プログラムのデザインが良かった	プログラム設計

表3 大グループと大グループに含まれる中・小グループ

大グループ	含まれる中グループ	含まれる小グループ	説明
L1: 自然体験による内面的変容	M1: 非日常の自然との出会いと楽しさへの没入	G1: 初めての非日常体験	初めて触れる自然や非日常空間が新鮮な驚きと夢中になる体験を生み出し自然との感性が目覚める。
		G2: 夢中になれる楽しさ	
		G8: 自然との共鳴	
	M2: 困難の克服と自己変容	G3: 自然の試練 G4: 自己成長と未来への展望	試練を乗り越える体験を通じて、達成感と技能の向上を実感し、さらなる挑戦への意欲が芽生え、将来の自己像を描く契機となった。
	M3: 学びの深化と感情の統合	G6: 心の満足と達成と感謝 G7: 体験を通じた学びの深化	自然体験の積み重ねが満足感・達成感・感謝となり、内面での理解と感情が統合される。
		G5: 人との出会いと深まる絆	仲間と体験を共にすることで、安心感や喜びを感じ、信頼関係が育まれていった。
		G9: 行動を後押しする動機づけ G10: 専門的支援の力	安心して挑戦できる環境と導きが、体験の質を高め、内面的変容の土台をつくる。
	M4: 体験を支える外的支援	G11: プログラム設計	

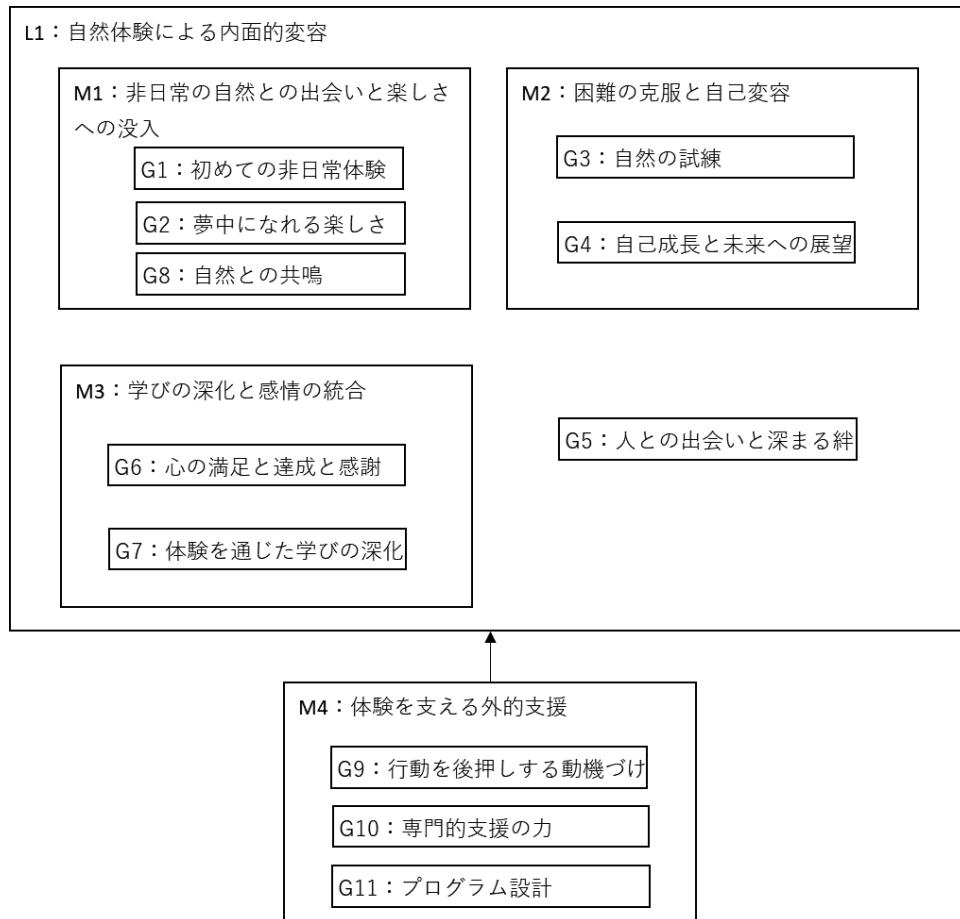


図2 KJ法によるラベルの図解化

感が育まれ、内面的な変化が促進されたことが考えられる。そして、「将来につなげたいという欲求」が生まれていたことから、体験を通じて自己の将来像や社会への関わり方についての意識が形成されつつあったことが明らかとなった。

これら一連の変化は、「動機づけ」「専門的支援」「プログラム設計」といった外的な支えがあつてこそ、学びやすい環境が整えられていたことにも注目すべきである。

以上のことから、本実習は学生にとって、自然体験を通じて新たな気づきを得ると同時に、困難の克服を通して自信を深め、学びと感情を統合しながら将来への意欲を高める重要な教育的機会となっていたと考えられる。今後は、こうした知見を活かし、学生の内面的な成長をより確実に支援するための実習設計や振り返りの場づくりが求められる。

### (3) 質的調査B(参与観察)の結果と考察

参与観察を通じて、受講者がこれまで経験したことのない活動に対して楽しみながら積極的に挑戦し、技術習得に苦労しつつも集中して取り組む姿が確認された。最終的には、設定された目標を達成し、高い満足感を得ていたことがうかがえた。

また、慣れない自然環境の中で、学生たちは当初こそ戸惑いを見せたものの、次第に自然の厳しさを

受け止めながら適応し、自然の中で過ごすことの心地よさや楽しさを実感していった。中には、今回の体験が自己の学びや生き方に対する視野を広げる契機となったことも示唆された。

第一著者自身は、ゴルフを除くすべての実習に計画段階から関与し、教員の立場として、学生の学びを支援する役割を担った。その中で特に意識したのは、リスク管理と金銭的制約への配慮である。プログラム構築にあたっては、学生の安全と安心を最優先にしつつ、体験の質を確保するために信頼できる指導者の配置やアメニティ面での工夫を行い、より快適な環境づくりに努めた。その結果、学生たちは実習中に活動へ集中し、自らの技術を高めながら主体的に取り組む様子が多く見られた。これらの姿は、実習が教育的に大きな意義を持つことを示すものであった。

一方で、良質な体験を得られたにもかかわらず、それを十分に振り返り、学びとして深めていく点では課題が残った。日誌やレポートによる個別の振り返りは実施されたが、仲間と共有し、相互にフィードバックを受けながら自己の気づきをさらに発展させるような「学びの場」は十分に機能していたとは言いたい。

今後は、実習の開始前から探究的学びの枠組みやプロセスを共有し、学生が主体的に内省できるような振り返りの仕組みを整備する必要がある。体験を「やって終わり」にするのではなく、得た刺激を意味づけ、将来につながる学びへと昇華させる仕掛けが重要となる。

このように、実習では「体験の質」だけでなく、「学びの質」にも焦点を当て、学生自身がその意味を見出し、他者と共有しながら自己の成長や将来に結びつけていけるような実習設計が求められる。

#### (4) 総合考察

本研究は、神奈川大学における自然体験型実習が、学生の非認知能力やライフスキルの育成にどのような影響を与えるかについて、量的調査・質的調査A・質的調査B（参与観察）の三側面から総合的に検討したものである。

まず、量的調査では、「課題価値測定尺度」のいくつかの下位尺度（公的獲得価値、私的獲得価値、興味価値）において実習前後での有意な向上が確認された。これは、実習が学生にとって社会的意義を実感できる経験であると同時に、自己成長や達成感を伴う活動であったことを示している。

次に、質的調査A（自由記述のKJ法分析）からは、「初めての非日常体験を通して、夢中になれる楽しさを味わい、自然との共鳴が生まれる。自然の試練に直面し、それを乗り越える中で、自己成長や未来への展望が得られる。体験を通じた学びが深まり、心の満足・達成感・感謝の気持ちが統合される。人との出会いや絆も深まり、こうした心の変容は、動機づけや専門的支援、プログラム設計によって促進されている」といった一連の心理的な変化とその背景要因との関係が明らかになった。

これらの結果は量的データとも整合しており、実習が内面的な変容や動機づけの面でも意義のある経験であったことを裏付けている。

さらに、質的調査B（参与観察）を通しては、実習中に学生が技術習得に集中し、主体的に活動へ取り組む姿が確認された。教員としては、リスク管理やコストへの配慮を前提に、体験の質と指導体制、環境整備に重点を置くことで、学生の満足度を高めることができた。一方で、体験後の振り返りや学びの共有が十分に行われていなかったという課題も明らかになった。実習中に日誌記述やレポート提出を課していたものの、非日常体験からの学びを内省的に定着させ、他者と共有する仕組みには限界があった。

以上の結果を総合すると、自然体験型実習は、学生の価値認識を多面的に高め、内発的動機づけやプローティーク（外的集中）を通じて学習への主体的な関与を促進していることが明らかになった。特に、自然という予測不可能かつ刺激的な環境に身を置くことで、自己の内面と向き合う機会が生まれ、それが将来への意欲やキャリア形成への自覚へとつながっている点は、実習の大きな教育的意義であるといえ

る。

今後の課題としては、こうした有意義な体験を一過性に終わらせず、学びへと昇華させる仕掛けづくりが求められる。具体的には、実習前に探究的な学びの枠組みや目的を明確に共有するとともに、リフレクションを支援するツールの導入を検討し、学生の内省を深める工夫が必要である。「体験の質」の向上とともに、「学びの質」にも焦点をあて、学生自身が意味づけを行い、それを他者と共有しながら将来に活かしていくような実習設計が求められる。

一方で、本研究には以下の限界がある。第一に、サンプルサイズが小さく、結果の一般化には慎重な解釈が必要である。第二に、心理的変容を自己評価に依存して測定しており、今後は観察やインタビューを組み合わせたより客観的な評価手法の導入が求められる。第三に、短期的な変化のみを捉えており、持続的な影響の検討にはフォローアップ調査が必要である。さらに、参加者の個人差や指導者の影響など、心理的変容に関与する多様な要因の統制も今後の課題である。

## 5. 結論

本研究は、神奈川大学における自然体験活動を通じて、探究的学びを深化させる野外教育の可能性を検討した。量的データではライフケースキルや Grit に変化は見られなかったものの、課題価値認識や外的集中といった、学生が外部環境に対して主体的かつ深く関わる側面に肯定的な変化が認められた。また、質的データと参与観察からは、自然という非日常的な環境が内省を促し、体験を学びに転化するには意図的な省察支援が重要であることが示唆された。

今後は、プログラムに計画的な振り返りの仕組みや問い合わせを組み込み、非認知的変化を可視化する評価手法の開発を進めることで、大学教育における実践知の育成を支える新たな野外教育モデルの構築が期待される。本研究はその基礎的な一步として、自然体験が高等教育における探究的学びに果たしうる意義を明らかにした点に意義がある。

### 引用文献

- 1) OECD (2015) Skills for Social Progress. OECD publishing.
- 2) World Economic Forum (2022) The Future of Jobs Report 2022. World Economic Forum, <https://www.weforum.org/reports/the-future-of-jobs-report-2022>
- 3) James J. Heckman · Tim Kautz (2012) Hard evidence on soft skill. *Labour Economics* 19, 451–264.
- 4) 内閣府 (2023) 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（令和4年度）. 内閣府, [https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r04/honpen/b1\\_03\\_02.html](https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r04/honpen/b1_03_02.html)
- 5) 文部科学省 (2020) 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）. 中央教育審議会, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1421520\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1421520_00001.htm)
- 6) Kolb, D. A. (1984). *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*. Prentice-Hall.
- 7) Hattie, J., Marsh, H. W., Neill, J. T., & Richards, G. E. (1997) Adventure education and outward bound: Out-of-class experiences that make a lasting difference. *Review of Educational Research*, Vol. 67, No. 1, 43–87.
- 8) 井口成明・佐藤国正・廣川充志 (2020) 大学生における自然体験活動の教育的効果について. 桐蔭論叢第43号, 65–72.
- 9) 徳田正彦・粥川道子・安原政志・佐藤悦子 (2017) 自然体験活動が大学生の社会人基礎力に及ぼす影響. 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要第8号, 127–139.
- 10) 徳田真彦・青木康太朗・瀧直也・向後佑香・井原久美子・福富優・中丸慎吾・坂谷充 (2024) 大学野外実習における参加者の社会人基礎力の変容. *野外教育研究* 27, 37–49.
- 11) WHO (1997) WHO・ライフケースキル教育プログラム. 大修館書店.

- 12) OECD (2023) OECD Survey on Social and Emotional Skills: Towards a more holistic assessment of students' development. OECD, <https://www.oecd.org/education/survey-on-social-and-emotional-skills/>
- 13) 伊田勝憲 (2001) 課題価値評定尺度作成の試み. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, 48, 83-95.
- 14) 島本好平・石井源信 (2006) 大学生における日常生活スキル尺度の開発. 教育心理学研究 54 (2), 211-221.
- 15) 西川一二・奥上紫緒里・雨宮俊彦 (2015) 日本語版 Short Grit (Grit-S) 尺度の作成. パーソナリティ研究, 24 (2), 167-169.
- 16) Marty-Dugas, J · Smilek, D. (2019) Deep effortless concentration: Re-examining the flow concept and exploring relations with inattention, absorption, and personality. Psychological research, 83 (8), 1760-1777.
- 17) チクセントミハイ, M. (著), 今村浩明 (訳). (2016) フロー体験入門——楽しみと創造の心理学. 世界思想社.
- 18) 青柳健隆 (2024) キャリア教育を推進するうえでスポーツが果たす役割. 体育科教育, 第 72 卷第 10 号, 20-23.
- 19) Hiroya Endo, Yoji Omoto, Kenryu Aoyagi, Koichiro Oka, Yoshinori Shiota (2019) Impact of Long-Distance Swimming "Enei" on Japanese University Students' Grit Advances in Physical Education. Vol. 10 No. 01, <http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>